

目 次

— Table of Contents —

第6回SWYAA国際大会	3
「世界青年の船」事業事後活動連携強化プログラム	13
「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議	19
6th SWYAA Global Assembly	45
The Ship for World Youth Alumni Association Post-Program Activities Promotion Programs	55
Tokyo Conference for the Ex-Participating Youth	61
資料編 (Appendix)	89

第6回SWYAA国際大会

2012年10月4日～10月8日



第6回SWYAA国際大会

SWYAA国際大会の目的

- 1) 参加国や参加回の異なる「世界青年の船」事業の既参加青年が会う機会を提供し、意見交換を通じて国際ネットワークの強化を図る機会とする
- 2) 既参加青年が訪問国の文化と人々を知る機会とする
- 3) 既参加青年がボランティア活動に参加し、社会貢献活動に参加する機会を提供する
- 4) 世界各国で実施されている事後活動について情報交換をする機会とする
- 5) SWYAA国際大会の開催や参加を通じてSWYAAの活性化を図る

概要

大会名称： 第6回SWYAA国際大会（第17回インターナショナル・リユニオン）
開催日程： 2012年10月4日～8日
主 催： 日本青年国際交流機構、バーレーン「世界青年の船」事後活動組織
後 援： バーレーン政府青年・スポーツ庁
同時開催： 「世界青年の船」事業事後活動協議会
参加費： 350米ドル（早期申込割引300米ドル）
参加者： 118名（21か国）

第6回SWYAA国際大会は、青年スポーツ最高評議会議長のShaikh Nasser bin Hamad Al Khalifa殿下の後援を受けて開催された。バーレーン「世界青年の船」事後活動組織はバーレーン政府青年・スポーツ庁と協力して、バーレーンで開催された第6回SWYAA国際大会の準備のための実行委員会を編成した。公式プログラムは2012年10月4日～8日の期間に実施された。実行委員は様々な活動における視察先の選定から調整にいたるまで、詳細な日程を準備した。実行委員はいくつかの作業班に分かれ、各班は実行委員会で定めた主な役割に基づき、担当の作業をこなした。以下が実行委員会に基づき編成された作業班の一覧である。

- 実行委員長
- 副実行委員長
- 食事と宿泊担当
- プログラムと参加者受付担当
- プレス担当
- 輸送担当
- 協賛品担当
- 会計担当
- ウェブサイト担当
- 事後活動協議会担当

活動日程

日付	時間	活動
公式プログラム		
10月3日 (水)	終日	参加者到着
10月4日 (木)	6:00 - 8:30	朝食
	9:15 - 11:50	モーニング・アッセンブリー及びアイスブレイキング
	12:10 - 13:40	バーレーン国立博物館訪問
	14:10 - 15:15	昼食
	15:30 - 16:45	バーレーン要塞見学
	19:30 - 22:40	閉会式
10月5日 (金)	6:00 - 9:00	朝食
	10:30 - 11:10	バーレーン石油博物館訪問
	12:00 - 14:00	昼食
	14:30 - 16:50	バーレーンF1サーキット見学
	17:00 - 21:45	王家馬術クラブにて伝統的な夕食会
10月6日 (土)	6:00 - 9:00	朝食
	9:45 - 10:50	コーラン博物館訪問
	11:00 - 12:30	アルファター・モスク見学
	12:45 - 15:20	昼食
	16:50 - 20:50	事後活動協議会
	21:40 - 23:20	夕食
10月7日 (日)	6:00 - 9:00	朝食
	10:30 - 12:00	課題別視察及び社会貢献施設訪問 Group A: 湾岸石油化学工業会社(GPIC) Group B: バーレーン大学 Group C: 女性最高評議会 Group D: ムハラク高齢者社会福祉センター
	13:30 - 14:30	昼食
	16:30 - 19:00	Group 1: 旧市街散策及び伝統菓子ハルワ工場訪問 Group 2: 自由時間
	20:30 - 23:00	夕食
10月8日 (月)	6:00 - 9:00	朝食
	9:00 - 11:30	Group 1: 自由時間 Group 2: 旧市街散策及び伝統菓子ハルワ工場訪問
	13:00 - 14:00	昼食
	15:00 - 18:00	自由時間
	19:30 - 22:30	フェアウェル・ディナー
10月9日 (火)	終日	参加者帰国

10月4日(木)

前日にほとんどの参加者が到着し、久しぶりの再会を果たしたメンバーと、近況報告をしながら朝食を取った。朝食後、SWYAA国際大会(以下、GA)最初のプログラムはモーニング・アセンブリーだった。実行委員のEman Al Bannaの歓迎のあいさつ、スケジュール確認、注意事項、実行委員紹介、そしてアイスブレイキングが行われた。アイスブレイキングでは、2列になって自己紹介をしたり、チームで協力して、与えられた材料を使って、水に浮く船を作るゲームをしたりした。このセッションは違う年度に乗船した人と話す良いきっかけとなった。その後、初めに配られたGA公式ポロシャツを着てバーレーン国立博物館へ向かった。現地の既参加青年のガイドにも助けられ、バーレーンの歴史、文化、昔の市場の様子、服装等を知ることができた。

昼食後はユネスコの世界遺産であるバーレーン要塞を見学した。ここは1500年代初頭、大航海時代に新たな海洋航路を開拓していたポルトガル人が、インド、アフリカ、ヨーロッパを中継する交易拠点として、バーレーンに着目し、この島を占領した時に建設された要塞である。そのため、今でも通称「ポルトガル要塞」と呼ばれている。要塞の敷地面積が広大で、見晴らしの良い所だったので、昔土地を治めるのに都合のいい場所だったのだろうと感じた。

夜に開催されたオープニング・セレモニーは、国の重要な文化行事にしか使うことのできない、アラッド要塞で行われた。会場はこの日のためだけに設営された立派なものだった。このオープニング・セレモニーはバーレーン政府青年・スポーツ庁の協力のもと、青年スポーツ最高評議会議長Shaikh Nasser bin Hamad Al Khalifa殿下の後援を受けて開催された。セレモニーではShaikh Nasser bin Hamad Al Khalifa殿下と角茂樹日本国大使によるあいさつの後、内閣府の久津摩敏生参事官が内閣府中塚一宏特命担当大臣からのあいさつ文を代読した。その後、この日のオープニング・セレモニーのために特注された、バーレーンの歴史ドキュメント映像がアラッド要塞の壁をスクリーン代わりに上映された。公式ギフト交換の後には既参加青年と招待客約320名で記念撮影をした。このセレモニーを通して、バーレーン王国がいかに青少年育成に力を入れているか、内閣府が主催しているこの事業への参加に誇りを持っているかが伝わってきた。「世界青年の船」事業で私たちがいかに貴重な体験をさせてもらったのかを実感しながらこの日は幕を閉じた。

10月5日(金)

朝食後、石油博物館へ向かった。館内ではバーレーンの既参加青年が通訳を務め、ガイドによる説明があった。バーレーンが1932年に中東湾岸諸国中で最初に石油が発見された国であることや石油が見つかる前は真珠

産業で栄えていたこと、石油を巡るイラクやサウジアラビアとバーレーンとの交流など多くの史実を学んだ。また、博物館の側にあるバーレーンで最も古い石油の採掘場所も見学することができた。最後に博物館の前で公式写真の撮影を行い、昼食の会場であるアル・アリーン動物園へ向かった。アル・アリーン動物園では、食事を終えた者から園内を散策し、思い思いに鷹やラクダなど現地の様々な動物との触れ合いを楽しんだ。

昼食の後、バーレーンを代表するF1サーキット場であるバーレーン国際サーキットに向かった。施設見学に加えて本格的なゴーカートの体験をすることができ、多くの参加青年がそのスピードとスリルを楽しんだ。約2時間半の滞在を終えた後、夕食の会場である王家馬術クラブへ向かった。会場にはバーレーンの伝統的な大型テントが建てられており、その中と野外に設置されたテーブルで夕食を取った。また、食事の前には王族が乗る稀少な品種の馬によるパフォーマンスがあり、特別にそれらの馬に乗る体験もさせていただいた。この貴重な経験について、参加者からは多数の感動の声が聞かれた。通常のレストランではなくテントの中あるいは野外のテーブルで伝統的な料理をいただき、また貴重な乗馬体験をすることができたこの日の夕食は、参加者にとって非常に印象深い経験となった。

10月6日(土)

三日目の始めのプログラムではコーラン博物館へ行った。そこには様々なコーランがあり、60cm×80cmの大きな本から、ごま・米・ひよこ豆に書いてあるものまであった。またパキスタン・モロッコ・インド・トルコ・カタール・シリアのコーランは字体も装飾もそれぞれ違い、年代物の皮に書かれたものから、世界で初めて印刷されたものまで多様な蔵書があった。見学をしてみて改めて、イスラム教は古くから世界の多くの国で信仰されている宗教であると感じた。博物館の前で集合写真を撮った後、バーレーン最大のアルファター・モスクの見学へ向かった。このモスクはとても美しく、床はイタリア製大理石、また絨毯、ランプ、スタンドグラス等は様々な国からの特注品でできていた。このモスクは最大7,000人の礼拝者を収容可能で、入り口でヒジャブとブルカを無料で貸してくれるので、金曜日以外は旅行者であっても自由に見学ができる。参加者はいくつかのグループに分かれ、モスクの中をガイドしてもらった。一番印象的だったのはモスクの正面の「ミフラブ」という窪みで、メッカにあるカアバ(神殿)の方向を示しており、礼拝をするときの正面となる。また、これは世界最古のスピーカーだという説明を受けた。

レストランでの昼食後ホテルに戻り、このGA最大のイベントである、事後活動協議会が始まった。

2012年3月に開催された既参加青年東京連絡会議の報告の後に行われた、各国の社会貢献活動の発表についての報告（抜粋）を下記に記載する。

バーレーン：

恵まれない家庭の清掃プロジェクト、チャリティのために服を寄付する活動、病院にいる子供たちを訪ねる活動、ソマリアの飢餓に苦しむ人々の支援、ミャンマーのアラカン難民の支援、シリア戦争難民の支援、シリア国境でのイスラエル病院の支援等の活動を行っている。

オーストラリア：

国が大きいためほとんどの活動は個人で行われている。例えば、植林をしたり、既参加青年から本の寄附を集めてフィジーに図書館を建設するプロジェクトを行った。

ブラジル：

「世界青年の船」事業の事前研修への協力のほか、2011年の「献血の日」に献血をした。これからの活動としては、様々な地域で日本人コミュニティとのつながりを深めていくことを計画している。Homestay+1のようなプロジェクトをワールドカップの開催に合わせて計画している。

カナダ：

東日本大震災の被災者への寄付をした。カナダは国土面積が広いので、個人的なプロジェクトが多い。「E180」という個人の知識を共有するウェブサイトを作った。

エジプト：

第2回、4回、6回の「世界青年の船」事業の既参加青年たちがまだ活発に活動している。日本・エジプト間のネットワークが強く、日本国大使館で「世界青年の船」事業について紹介する機会にも恵まれた。また、「世界青年の船」事業について紹介したJEN (Japan Egypt Network) オープンサロンのイベントには、日本国大使が最初から最後まで参加して下さった。

ギリシャ：

Homestay+1の活動を活発に行っている。活動レポートを www.swyworld.net にアップロードして報告をしている。「SWYAA Radio」という既参加青年の交流促進のための24時間態勢のウェブラジオを近日中に立ち上げる。

日本：

「One More Child Goes To School」という、スリランカの学校に文具、本、黒板等を届けるプロジェクトを継続している。東日本大震災復興支援プロジェクトを各地

域で活発に行っている。岩手県では被災者のメンタルサポートの一環として実施したイベントで伝統衣装の試着コーナーを作ったり、震災を忘れないために「縁側カフェ」というイベントを開催したりしている。既参加青年が勤める企業の協力を得て宮城県に中古のパソコンを提供する活動も行った。また、山形県のメンバーが被災者を温泉に招待する活動も実施した。福島県では久保健太郎氏 (SWY22) が個人プロジェクトとして世界中の既参加青年から震災に対するメッセージを写真付きで集めて展覧会を開いた。小宮理奈氏 (SWY21) が英国の学生ボランティアと共同で Action for UK Japan という活動も実施した。

ケニア：

2011年によくケニア「世界青年の船」事後活動組織のホームページ(URL <http://swyaakenya.org>)が立ち上がった。また、David Jonathan Okwiri氏 (SWY22) が運営しているスラム街にある学校へのサポートを Tupendane というプロジェクト名で続けている。学校運営の収入源を確保するために毎月清掃活動をしたり、手作りのアート作品やアクセサリーの販売も行ったりしている。

メキシコ：

2年前によく「世界青年の船」事業参加青年の選考の主導権を握ることができるようになった。また、日本国大使館との関係を深めている。「世界青年の船」事業25周年記念 (Silver Jubilee) にイベントを企画している。フェイスブックを使って、メキシコ国内の既参加青年の所在を突き止め、ネットワークを強化する努力をしている。

オマーン：

Homestay+1のプロジェクトを実施している。また、日本の東日本大震災の被災地である福島県からの子供たちを2週間受け入れた。「SWYAA オマーンの日」として年に一度、ラマダン中に社会貢献活動を実施する日を設定し、その日は終日、普段忙しい人もこのイベントに時間を使うことを約束している。この日には、外国人労働者で断食後に十分に食事を取れない人への食事の提供、献血、入院していて外出できない子供たちへの贈り物など、様々な活動を行い、一日の最後には、派遣年度の違う青年たちで交流を深めた。詳しくは www.swyworld.net に報告されている。また日本・オマーンの交流14周年記念事業も行った。

スウェーデン：

2011年に北欧三国(スウェーデン、フィンランド、ノルウェー)で同窓会を開催した。同窓会には9か国から25人の参加があり、スウェーデンとフィンランドの間のアー

ランド島で行われた。この期間に広島原爆投下記念日が重なったので、400人の前でソーラン節を踊り、折鶴の作り方を教えた。また、2013年にはStay tuned という「世界青年の船」事業の映像を集めるプロジェクトを企画している。主な目的は「世界青年の船」事業の広報用のプロモーションビデオを作り、思い出を共有することである。

スペイン：

「世界青年の船」事業や青年の社会参加について、会議や大学祭で紹介した。また日本文化を広める活動もしている。Carne Feliu氏 (SWY13)が運営している日本語教室には日本語コースに加え、日本文化について学ぶコースもある。そのほかにもSWYスピリットを忘れないために、第2回「世界青年の船」事業20周年記念の同窓会を開催した。国際キャンプの開催や、NGOの設立等様々な個人プロジェクトも行っている。

トルコ：

トルコ国内で起きたヴァン地区の震災被災者の支援活動を実施している。第25回「世界青年の船」事業日本参加青年派遣プログラムとして、異文化理解コースの受入準備をしている。また、イズミルでミニ・リユニオンを開催し、国内外から多くの既参加青年が集まった。

UAE：

UAE「世界青年の船」事後活動組織のメンバーは15～20人から約100人に増えた。シャルジャで子供たちにリーダーシップとチームワークについて学んでもらうためのサマーキャンプを開催した。また、ラマダン期間中、年に一度の同窓会を実施した。

ベネズエラ：

Learn Live Love (LLL) という青少年育成プログラムを立ち上げ、実施している。LLLは貧困と貧困層及び社会的に疎外された人々をなくすことを目的とした教育プログラムである。また、森林再生のボランティア活動に参加したり、ボランティアプロジェクト「御縁」の活動の一環として日本文化を子供たちに教える活動を実施したりしたほか、清掃活動への参加、日本の天皇誕生日のお祝い、運動会等を実施した。

イエメン：

環境保護のための草の根活動として世界規模で行われている「350.org」の活動に参加した。また「既参加青年のその後」というテーマでテレビ番組に出演した。そのほか、日本国大使館で行われる日本文化週間への参加や、恵まれない人々への食料と服の寄付、献血、街の清掃活動等を行った。

ペルー：

第24回「世界青年の船」事業の事前研修を4週間行った。Homestay +1のプロジェクトやチャリティコンサートも開催した。活動的な既参加青年になるための合宿も実施した。Learn Live Loveプロジェクトにも参加している。また、次回のSWYAA国際大会の開催がペルーに決定した。2013年8月末に開催を予定している。オブシショナルツアーは9月初旬に実施予定である。

各国の発表が終わると「世界青年の船」事業の現状と継続について説明があった。トルコで行われたミニ・リユニオンでの提言も発表された。各国の発表が終わった時点で既に夕食の時間を大幅に過ぎており、その後予定されていたディスカッションは省略された。レストランに移動し、そこで内閣府の久津摩敏生参事官が内閣府では「世界青年の船」事業を存続できるように働きかけているという内容のスピーチをされた。

10月7日(日)

AからDの4班に分かれてテーマ別の施設訪問を行った。

A班はバーレーン最大の湾岸石油化学工業会社 (Gulf Petrochemical Industries Corporation 以下、GPIC) を訪問した。最初にAbdulahman A. Hussain Jawahery 社長のスピーチがあった。社長は我々を歓迎する旨を述べられ、過去にビジネスでかかわった日系企業との異文化理解にまつわるストーリーを交えながら、「世界青年の船」事業がいかにか有意義な事業であるかをお話しになった。特に、「このような若者への貴重な機会の提供は、最高の投資であり、日本政府はずばらしい事業を実施している」という言葉が印象深かった。スピーチの後に企業説明のプレゼンテーションがあり、続いて施設全体のミニチュアが展示されている部屋を見学して施設の説明を受けた。GPICは天然ガスを原料としたアンモニアとメタノールの生産及びアンモニアと二酸化炭素を原料とした尿素の生産を行っており、温室効果ガス削減へ精力的に取り組んでいる。その後、バスで施設を回り、それらを生産する工場や、近海の漁業を活性化させるための稚魚育成の現場見学も行った。訪問を通して、直接自社の利益につながらない慈善活動を行っている点や、社長と社員の距離が非常に近い点はずばらしいという参加青年の声が聞かれた。見学の後はGPICクラブというGPIC社員専用のレクリエーション施設で昼食を取り、記念撮影をしてからホテルへ向かった。

B班は、バーレーン大学を訪問した。バーレーン大学は九つの学部を有するバーレーン最大の大学であり、学士号と修士号を取得することができる国内で唯一の大学でもある。到着後、日本人建築家である丹下健三氏が設計した中央図書館を見学した。中央図書館は四つの図書

館から成るパーレン大学の図書館のうち最も大きなものでここでは、1986年に設立されたパーレン大学の歴史や、近年導入したという電子書籍についての説明を聞くことができた。その後大学構内をバスで回り、IT科学学部や教育学部などの施設を見学した。特に印象に残ったのはIT科学学部にある、ゼイン電子学習センターの見学であった。企業をスポンサーとして資金を調達し、運営しているという。また、大学のメディアセンターでは最先端の機器を備えたスタジオを見学し、多目的ホールでは音楽グループによるピアノ、フルート、ギターの演奏があった。見学後、センター内でシャワルマなどの軽食をいただき、教職員と学生の方々の温かいおもてなしを受けた。今回の訪問を通して、その美しいキャンパスの外観と最新の設備に対する参加青年の驚きの声が多く聞かれた。

C班の女性最高評議会（Supreme Council for Women以下、SCW）への訪問では、メディア担当の代表の方がSCWの成り立ちや取組、そして若者との連携について、分かりやすく話して下さった。Sabeeka bint Ibrahim Al Khalifa王妃が会長を務め、国を挙げて女性の社会的地位の向上を目指している印象を受けた。SCWでは、女性の起業家支援研修などの実践的なプログラムだけでなく、女性を対象としたカウンセリングや法的支援などきめ細かいサービスも行っていることを学んだ。地元組織や近隣諸国との連携が活発で、国際連合など世界的な動きと連動しながら、国内外の女性の地位向上にも尽力していることも分かった。こうしたSCWの取組の中で、最も興味深く思ったのは、若者との連携である。若者委員会という組織がSCWにあり、青年たちも参画して、女性の権利の普及活動や女性の地位向上に関するイベントを行っているようだ。将来を担う若者たちが、SCWで積極的に取り組んでいることはとてもすばらしいと感じた。

D班の訪問したムハラク高齢者社会福祉センターでは、到着と同時に「ハッパン」という、皮を使った楽器と太鼓の軽快な演奏で迎えられた。そして歓迎の「マシュムーム」という葉っぱのシャワーとマシュムームでできたネックレスをかけてもらい、アラブのお菓子とアラビックコーヒーをいただいた。部屋を一周するように置いてあった椅子には15人くらいの高齢者の女性が座っていた。私たちのいた部屋は壁に無数の棚があり、パーレンの昔の物が飾られていた。演奏が終わると、この団体で行われている行事や団体の目的等を説明してもらった。また、社会発展を担う省より、地域開発プロジェクトの代表者であるLatifa Al Burshaid氏も同席していたので質疑応答もできた。高齢者の女性たちが手作りして販売している物も見せてもらい、その後、一緒に伝統的な朝食をいただきながら、「世界青年の船」事業に参加したときに覚えた簡単なアラビア語で会話をし

た。一言話すたびに歓声があがった。難しい会話はパーレンの既参加青年を介して行われた。すばらしい笑顔の現地の高齢者の女性たちとの交流ができ、貴重な体験となった。最後にお礼の意味を込めて即興でスペイン語と日本語で歌を披露した。

ホテルに到着後、参加青年の半数はムハラクというユネスコの世界遺産に登録されている伝統的な町並みが残る地区へ向かい、残りの半数は自由時間をとった。ムハラク地区へ向かったグループは午後4時半に到着して建物を見てまわり、女性4人がかりで民族衣装を作る伝統的な手織りの実演や、手工芸品の展示、伝統的な造りの家などを見学した。特に興味深かった点は、伝統的な町並みを残しながら、建物の内部は極めて近代的な造りになっており、地域の住民も利用できる施設が多かったことである。また、ハルワと呼ばれる伝統的なお菓子を作る工場の見学も行った。ハルワを専門に販売している菓子店で試食をし、少し歩いた場所にある製造工場を見学した。巨大な釜とパーナーで製造するその熱気とスケールに圧倒された。

その後、夕食の会場であるマジスティック・ホテルに向かった。ビュッフェ形式の豪華な食事が振る舞われ、食後にはステージで参加青年によるソーラン節やラテンダンスなど参加型のパフォーマンスも行われた。参加年度を問わないその盛り上がりは、まるで最終日に行われるフェアウェル・パーティーではないかと錯覚するほどであり、この日の公式プログラムは23時に大盛況の中終了した。

10月8日（月）

最終日は昼食までは前日のグループ別に行動をした。昨日ムハラク地区を訪れたグループは昼食と夕食以外は自由時間を思い思いに過ごし、昨日自由時間があったグループは朝食後から昼食までの時間を使ってムハラク地区を訪問した。昼食はパーレン・モールにあるレストランで取り、希望者はそのままフリータイムとなり、17時にホテルに戻った。

19時半に、フェアウェル・ディナーの会場であるエリート・リゾート&スパに到着した。最初に大河原友子日本青年国際交流機構会長から今回のGAを総括する言葉と実行委員のメンバーへの感謝の意が述べられた。続いて実行委員会からの感想と公式写真を含む動画の鑑賞があり、第6回SWYAA国際大会の修了証書が各国の代表を通して全員に配られた。公式写真撮影の後に、ビュッフェ形式の食事を開始。食事を終えた後も参加青年は会場で歓談を楽しみ、そして別れを惜しんだ。22時40分をまわった頃に会場を後にし、第6回SWYAA国際大会の公式プログラムはすべて終了した。

10月4日から8日までの期間、バーレーンにて世界21か国から118名が一堂に会しSWYAA国際大会（以下、GA）が開催された。開会式は、幻想的なアラッド・フォート（要塞の跡）にて伝統的な音楽やダンスがエキゾチックな雰囲気盛り上げ、連日メディアなどにも多く取り上げられる程、国を挙げての大歓迎であった。

御臨席されたSheikh Nasser Bin Hamad Al Khalifa殿下は、世界中の青年たちに恩恵をもたらすこの事業を支援している日本政府に対し感謝の意を表し、GAは協力の重要性、理解、異文化交流、寛容性など共有しながら世界中の青年たちを育成することができるユニークな機会だと高く評価をした上で、バーレーンにてGAを開催することができ大変光栄だと語られた。

残念ながら日本で聞く中東のニュースは危険なイメージが多いので、私自身、初めての中東訪問に多少の不安を感じていた。しかし、バーレーン既参加青年たちの献身的で心温まる歓待、そして日本で抱いていたイメージとはかけ離れた安全で穏やかに生活している人々の姿を実際に見ることができ、国や人への印象はがらりと変わった。改めて「百聞は一見にしかず」ということを身をもって体験し、ステレオタイプで物事を判断してはいけないと強く感じた。

バーレーン博物館やグランドモスク、王家馬術クラブ

のショーを楽しみながらの夕食会などで歴史や伝統文化を体験し、バーレーン国際サーキットではパソコン登録でレースの結果がフェイスブック等に配信される最新式のカーレースを体験したり、課題別視察で近年のバーレーンを見聞することにより、古代から現代までのバーレーンを短時間にいろいろな角度から学ぶことができた。

事後活動協議会では各国の事後活動組織から社会貢献活動の報告があった。また、行政レビューの結果「世界青年の船」事業は来年の予算に計上されていないという現状を説明した。既参加青年たちは、この事業は世界中に日本ファンを作り、未来を担う有能な青年育成に多大な貢献をしている、世界各地に日本の理解者である多彩な人材を輩出することは日本の国益となるなどと力説した。自分たちを成長させてくれた「世界青年の船」事業を継続させるために今まで培ってきた世界中のネットワークを最大限にいかしながら社会に貢献し「世界青年の船」事業の価値を日本政府にアピールしていくと力強く言ってくれたのが印象的だった。「この事業の未来のために皆で協力しよう」来年ペルーでの再会を約束した後、青年たちは世界各地へ帰国していった。

最後になりますが、第6回GAを大成功に導いた、バーレーン政府及び事後活動組織の多大なる御支援、御協力に心から感謝いたします。シュクラン

バーレーン「世界青年の船」事後活動組織会長からのコメント

Ahmed A. Seyadi

バーレーンが主催国となり第6回SWYAA国際大会が開催された2012年10月は、すべてのバーレーン既参加青年、そしてバーレーン「世界青年の船」事後活動組織にとって、とても特別なひと月でした。

参加したすべての人はこの国際大会が素晴らしい融合の象徴であったことを理解したことと思います。世界各国から様々な年齢、言語（アラビア語、英語、日本語、スペイン語、フランス語、ロシア語、スウェーデン語など）、これまで一度も会ったことのない様々な信条、背景、特質を持つ参加者が一堂に会し、色彩豊かな融合を作りあげました。私自身、参加者名簿を見るだけで心躍るものがありました。上述したような様々な違いはあれど、共通の経験をした人々がその情熱を絶やさず、再度その絆を強めているからです。参加者は「世界青年の船」事業という特別な経験を共有し、強く結ばれています。彼らは皆世界に対し開けた視野を持ち、他の文化に敬意を払っています。また彼らは他国の人々や別の言語

を話す人々に新たに会うことに抵抗がなく、文化・信条が違う人たちとも積極的に会い、そこから互いに学んでいます。我々は多様性を持ち、より良い未来を願う家族のような存在です。この絵を少し離れたところから見ると、本大会で出会った既参加青年の存在のゆえに、このSWYスピリットのつながりが今後も長きにわたって続いていくものと分かるのです。

本大会の成功は実行委員、既参加青年、ボランティアの献身的な努力、そして多方面で多大な協力をいただいたバーレーン政府青年・スポーツ庁の協力なしには語ることができません。すべての運営関係者は参加者を出迎えるために何か月もの間たゆまぬ努力をしてきました。しかし本大会を本当の成功に導いたのは参加者の皆さんであったと感じます。参加者のおかげでここまで実りのある大会となりました。お忙しい中、バーレーンでの第6回SWYAA国際大会に参加するために来訪したすべての参加者に感謝しています。

バーレーン国際大会実行委員からのコメント

Eman Al Banna

初めにバーレーン「世界青年の船」事後活動組織（SWYAAバーレーン）及びSWYAA国際大会運営委員会を代表し、第6回SWYAA国際大会を本国にて開催する機会を与えて下さった日本青年国際交流機構に感謝申し上げます。本大会は大きな成功を収め閉幕しました。参加者が感謝と笑顔を胸に帰国していったことは、私たちにとって大変光栄なことでした。開催に至るまでの1年間は長い道のりで、事前調整は大変困難なものでした。運営委員は実施に向け献身的に活動をしてまいりました。本大会の成功はバーレーン政府青年・スポーツ庁（GOYS）の協力、そして実行委員会、小委員会の中で大変重要な役割を果たしたすべての既参加青年、ボランティアの努力の賜物です。

実行委員会の中では8名が中核としての役割を担っていました。うち3名はGOYSの職員で、残り5名がSWYAAバーレーンのメンバーでした。GOYSからの甚大なる協力を得られたことは、本大会が成功した主たる理由でもあります。この両者が共に協力し、大会を作り上げられたことで、大変大きな相乗効果を得ることができました。GOYSが公式行事を担当することで政府としての支援を行い、既参加青年たちはこれまでに各国で開催された国際大会の経験や過去に自主開催したりユニオンなどの経験を活用して積極的にかかわり、付加価値をもたらしました。

運営委員会のもとに小委員会が置かれ、運営委員会のメンバーが長を務めました。「食事と宿泊担当」「プログラムと参加者受付担当」「プレス担当」「輸送担当」「協賛品担当」「会計担当」「ウェブサイト担当」及び「事後活動協議会担当」の八つの小委員会では、合計20名の既参加青年とボランティアが重要な役割を果たしました。

本大会は「世界青年の船」事業の関係者から大変多くの参加者が参加しました。21か国から118名が参加し、全員が全く異なる背景、信教、信条を持ちながらも、皆が共通に持つSWYスピリットで強く結ばれました。

開会式はバーレーン国内での報道ぶりやメディアへの登場等に見られるように、私たちのサクセス・ストーリーの始まりでした。初めに、国王陛下の御子息であられるSheikh Nasser Bin Hamad Al Khalifa殿下の御臨席、御言葉を賜りました。そのほかにも殿下の御令弟であら

れるSheikh Khalid Bin Hamad Al Khalifa殿下、各省閣僚、駐バーレーン日本国大使閣下及びその他の各国大使など、多くの御来賓の方々に御臨席いただきました。開会式はバーレーンにとって文化的にも歴史的にも重要な史跡であるアラッド要塞で盛大に行われました。

5日間の会期中、参加者にはバーレーンの歴史、文化そして近代的な一面を見てもらうことができました。史跡訪問では、バーレーン要塞、バーレーン国立博物館、生命の樹、石油博物館に案内しました。文化学習体験では、旧ムハラク地区、伝統菓子を作るハルワ工場、アルファター・モスク、コーラン博物館を訪れ、王家馬術クラブではバーレーンナイトを体験しました。我が国の近代的なライフスタイルについては、バーレーン国際サーキットでのゴーカートの操縦や、我が国で最も近代的なショッピング・モールであるバーレーン・シティ・センター・モールへの訪問を通じて体験していただきました。

施設訪問では「女性の社会参画」「環境保護」「青少年育成」「社会貢献」という四つの大きなテーマのもと、女性最高評議会、湾岸石油化学工業会社（GPIC）、バーレーン大学、高齢者社会福祉センターを訪問しました。会期中に行われたこのような活動、訪問を通じ参加者は経験を共有し、意見を交換し、新たな友情を培い、互いに学び合いました。

今日、「世界青年の船」事業が岐路に立たされていることを踏まえ、本大会のメイン・プログラムである事後活動協議会では、参加者が各国での事後活動についての意見を共有し、最も重要なこととして、新規プロジェクトの立ち上げや、既存のプロジェクトの見直しの可能性を検証することにより、「世界青年の船」事業継続のためのアイデアを出し合いました。

本大会がバーレーンのテレビやラジオなど、多くのメディアに登場したことは「世界青年の船」事業が事業終了後も変革を起こし続け、人々の人生に大きな影響を与え、今日のそして未来のリーダーを育成し続けているということを対外的に示すことができ、大変有意義なものでした。

楽しい夢のような時間はあっという間に過ぎてしまいました。しかし私たちはまた改めて再会するためにしばしの別れを告げたのです。その日までSWYスピリットを胸に。

「世界青年の船」事業 事後活動連携強化プログラム

2013年2月15日～2月18日



第25回「世界青年の船」事業事後活動連携強化プログラム

派遣者

- | | | |
|---------|---------------------|-----------------------|
| ・ 池田 隆行 | 第22回「世界青年の船」事業既参加青年 | 東京都青年国際交流機構会員（本部運営委員） |
| ・ 品川 優 | 第22回「世界青年の船」事業既参加青年 | 神奈川県青年国際交流機構会員 |
| ・ 太田 梢 | 第23回「世界青年の船」事業既参加青年 | 埼玉県青年国際交流機構会員（本部運営委員） |

派遣日程

月 日	日 程
2月14日(木)	派遣者 神戸へ出発 市内ホテルにて打ち合わせ
2月15日(金)	第25回「世界青年の船」事業参加青年と合流 事後活動セッション実施準備等
2月16日(土)	<p>神戸出航</p> <p>【事後活動セッション】</p> <p>セッション1 【14:15 – 15:30】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事後活動セッションの概要説明 ・ SWYAAの概要と各国の活動紹介 ・ SWY25に乗船している既参加青年の紹介 ・ 既参加青年の事後活動事例発表 <ol style="list-style-type: none"> 1. ケニア教育支援 Tupendane: 品川 優 2. Reality of PPA: 太田 梢 3. Volunteering Project: Oliver Laris 4. SWYAA ベルーの活動について: Jose Sano Takahashi <p>セッション2 【15:45 – 17:00】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 分科会(SWY25に乗船している既参加青年による事後活動事例の紹介及びディスカッション) ・ セッションのまとめ
2月17日(日)	船内にてSWYAA及びIYEOブースの設置
2月18日(月)	第25回「世界青年の船」事業 大船渡 到着 派遣者 大船渡 出発

活動内容

ねらい

派遣者は、第25回「世界青年の船」事業（以下「SWY25」）の事後活動連携強化プログラムにおいて、次のねらいを持って、事後活動セッション及びその他の自主活動を実施した。

- SWY25参加青年（以下、参加青年）が内閣府の実施する青年国際交流事業、日本青年国際交流機構（以下、IYEO）及び「世界青年の船」事後活動組織（以下、SWYAA）について理解を深められるようにセッション及び自主活動に取り組む。
- 事業終了後、どのようにIYEOやSWYAA等を通じて、様々な社会貢献活動に取り組めば良いかを参加青年に理解してもらうために、管理部門及び指導官又はナショナル・デリゲーション・リーダー（以下、NL）として乗船している日本及び外国の「世界青年の船」事業既参加青年（以下、既参加青年）とともに事後活動の事例を紹介する。
- SWYAAのネットワークや既参加青年が所属する団体（NPO団体等）を活用・連携し、充実した活動に発展させていくことの重要性を伝える。
- 参加青年が、事後活動には様々な役割・方法・かわり方があることを知り、難しく考えずに活動に取り組めるようにする。
- 参加青年が事業参加後に事後活動としてどのような事をしたいのかをイメージできるようにする。
- 既参加青年及びIYEOの代表として参加青年と事後活動についての意見交換を行うとともに、参加青年の船内活動についてのアドバイス等を行う。

活動内容

<2月16日（土）事後活動セッション>

セッション1 14:15 - 15:30

ねらい：参加青年に事後活動の全体像を把握し、SWYAAやIYEOについての知識を深めることを通じて、事後活動参加への動機付けをすることをねらいとする。また、既参加青年による事業参加後の事後活動の事例を知り、参加青年が具体的に事後活動をイメージできるようにする。

内容：事後活動セッションの概要説明、各国のSWYAAの活動状況の共有、乗船している既参加青年の紹介、4人の既参加青年による事後活動の事例紹介等を行う。

所感：多くの既参加青年が下船後も事後活動を通して社会貢献を行っており、世界中で行われている事後活動とSWYAAの存在を認識してもらうことができた。また、活動の規模や方法、

手段が異なる4人の既参加青年の活動を紹介することによって事後活動の多様な在り方を示すことができた。



セッション2 15:45 - 17:00

ねらい：既参加青年の「世界青年の船」事業に参加した後の経験やIYEO及びSWYAAによる事後活動の事例を知り、参加青年が下船後の自分をイメージできるようにする。

内容：既参加青年により合計で19の分科会が実施され、参加青年は興味のあるトピックを選ぶ。

分科会テーマ

- リーダーシップ
- 青少年育成
- ボランティア、ロビー活動
- 復興支援ボランティア
- 貧しい人々への支援
- 国際ボランティア (JICA)
- 恵まれない子供たちへ教育の提供
- 言語教育
- 世界青年のバス
- IYEOを基盤にした活動 (日本参加青年向け)
- ホームステイ + 1 プロジェクト、SWY world.net
- SWY林間学校
- メディア (TVドキュメンタリー)
- メディア (雑誌編集)
- 海外留学 (エクアドル)
- 伝統文化 (茶道)
- 目の不自由な学生のためのキャンプ
- 日本における難民支援
- 地域開発

所感：分科会のテーマは担当する既参加青年に事前にヒアリングを行い、彼らが下船後から現在までの間に行ってきた事後活動を軸に設定した。分科会を多く設置することで1グループ当たりの人数を少なくし、質疑応答をしやすい雰囲気を作ることができた。また、既参加

青年の持つ多種多様な経験を参加青年に紹介し、事後活動について考えるきっかけを作ることができた。ただしグループによっては人数が少なすぎるところもあったので一人の参加者が二つ以上の分科会をまわる形式でも良かったであろう。



本当の航海は船を降りてから始まる

品川 優

今回の事後活動連携強化プログラムへの派遣を通して既参加青年にとって「世界青年の船」事業はいつでも挑戦の場であり、帰る場所であることを実感しました。一人の参加青年としてこの「世界青年の船」事業に参加してから早3年。いつかもう一度事業にかかわりたいと考えていたもののこんなに早く実現するとは想像をしていませんでした。私が担ったのは「事後活動を行っている既参加青年の一人として事後活動セッションを企画、進行する」という役目。事後活動セッションの代表者になってもらえないかという打診があった時、このような機会はめったにないと即座に是非と返事をしました。その時は自分に何ができるのか、そして具体的にどんなことを求められているのかわかりませんでした。とにかくできることをやろうという心構えでした。

限られた準備期間の中でどのようなセッションにしたいのかを互いに共有するうちに「事後活動はそれほど難しいものではない。自分がやりたいことを思いっきりやること、それを社会と結び付けていくこと。それが事後活動なんだ。」という共通の想いを見つけ出し、そこから「事後活動へのポジティブな印象を持ってもらう」ことを目標に掲げ、プログラム作りに取り掛かりました。この目標達成には乗船している既参加青年の協力が必要不可欠でした。何故ならば彼らに参加青年たちへ下船後の経験を生き生きと語ってもらうことで既参加青年になることや、事後活動にかかわることに対してポジティブな印象を直接与えることができるからです。

いざ怒涛の準備期間を終えて神戸港から乗船。そこからは、既参加青年に時間を取ってもらい、実際のこれまでの船内活動の話を伺い、私たちの目指す事後活動セッション像を共有しました。その過程で既参加青年はそれぞれ独自の事後活動を行ってきていて、それらをとてても良い顔で語ってくれる姿に安心をしたのを覚えています。そうして本当にぎりぎりまでタイムスケジュー

ルの調整や既参加青年への協力をお願いして、なんとか事後活動セッションの時間を迎えることができました。私自身も200人以上の前で自分自身が取り組んでいるTupendane（ツペングネ）という、「世界青年の船」事業から派生したケニアのスラムにある小学校支援活動について英語でプレゼンテーションをしました。この時、ふと3年前「世界青年の船」事業に参加した時の自分の姿がフラッシュバックし、コース・ディスカッションのまとめであるサマリー・フォーラムではたった5分のプレゼンテーションを2人で原稿を片手に行いましたが、極度に緊張していたことを思い出しました。ところが今回は全体の進行を務め、ほとんど台本を読まずに1人でプレゼンテーションを行い、なんとちょっとした笑いまでとることに成功したのです。最後にはしっかりと私からの参加青年へのメッセージ“You can do anything with SWY”を伝えて、何よりも終了後にSWY22とSWY25に乗船していた指導官の二人が私に駆け寄り“I'm proud of you.”とハグをしてくれた時に「3年間で自分も少しずつ成長していたんだ。」と実感し、達成感にあふれました。分科会でも様々な想いや悩み、希望を持つ参加青年との対話を持つことができました。中でもプログラムの短さに不満を持つ青年と話したときにも「この事業は下船してからが本当の始まり。でもその序章は今しかないから、それも楽しむしかないね!」と話して「あなたと話せて良かった。」と言われた時に、私が乗船した意味を見いだせたような気持ちでした。

下船からわずか3年、そしてまだ学生という身で輝かしいキャリアもなく、憧れられるロールモデルとは言えないでしょう。ですが今回のように船の上でできなくて悔しかったことが今はできている、船での出会いなしにはあり得なかった活動を今も継続している。そのように成長し続ける私でいることが、既参加青年としてこのセッションだけでなく、これからもできることなのでは

ないかと思えます。また、今回の経験で私自身も多くの学びました。自分が望めば常にたくさんの挑戦のチャンスが降ってきて、それを見守ってくれる仲間がいる、「世界青年の船」事業とは既参加青年にとってもそうい

う場であり続けるということを実感しました。このような機会を頂けたことに心から感謝するとともに、今後も既参加青年として事後活動を楽しみながら、社会と世界とつながり続けていきたいです。

「しなければならぬ」から「したい！」と思える事後活動へ

太田 梢

事後活動セッションで再乗船しませんかというお話を頂いたとき、下船してまだ2年しか経っておらず、事後活動について参加青年全員の前で発表できるほど立派な活動をしていないことに正直不安を感じていました。それでも下船後に事後活動について人一倍悩み、試行錯誤してきた経緯があったこともあり、そこから学んだことを伝えることが今回の自分の役割なのではないかと思いい、受けさせていただくことにしました。

事後活動セッションの準備はメールや電話でやりとりをして大枠を決め、神戸で乗船する前日にセッション担当者3人で集まり進めていきました。今回はセッションの時間が合計2時間半と例年に比べても圧倒的に短く、その分限られた時間内で参加青年たちに事後活動とは何か、下船後にどのような活動をするのかを考えるきっかけを与えなければならぬ、ということに対する難しさやプレッシャーを感じていました。それでも私たち3人は、事後活動というのは難しく考えるものではなく、一人一人が様々な方法で活動できるということ、短いセッションの中で事後活動の面白さをできる限り伝えよう！という目的を共有していたため、とてもスムーズに準備することができました。

今回のセッションでは事後活動の多様性を伝えるために、前半のインプットとして四つの事後活動を紹介し、私はその中で「Reality of PPAs（事後活動の現実）」という題で発表をしました。下船後に「世界青年の船」事業が廃止になるかもしれないと知った時、その危機感から同期のメンバー数名と事後活動の任意団体を立ち上げ活動をしていましたが、「船のために何か行動しなければならぬ」という使命感と、そのために日常生活を犠牲にして活動するということに限界を感じ悩んでいま

した。そして使命感と自己犠牲感を原動力にして事後活動をすることはできないと気が付いたのです。そんな折に、SWY23の持続可能な地球社会コースの指導官で、自宅で自給自足の生活をされている佐藤太先生の協力のもと、SWY林間学校という一泊二日のイベントを開催することになり、今も定期的に活動を続けています。今考えると、当初はいわゆる「事後活動」として特別に意識して活動していたわけではないのですが、周りから見たらそれが結果的に事後活動になっていました。「しなければならぬ」から「自分が本当にしたいこと」を事後活動にする、その大切さを今回の発表で自分なりに伝えました。

今回のSWY25はプログラムの大幅な変更により船内での活動日数は19日間と非常に短く、参加青年たちはやっと各国の参加青年と仲良くなり始め、船での日常にも慣れてきたところで、同時に下船間近であることに焦りを感じている様子でした。それでも、下船して1年と経っていない既参加青年からのビデオメッセージや、船に管理部員やNLとして乗船していた26人の既参加青年の様々な立場からの体験談や生き生きとした様子は、少なくとも青年たちが下船後のイメージを持つきっかけになったのではないかと思います。

事後活動セッションは本来、参加青年に向けて事後活動について考えてもらうきっかけを与えるものですが、こうして再乗船させていただいたことで下船から2年経った私にとっても船での経験を振り返り、次にどのようなつなげるべきかを再度考えるととても良い機会になりました。このような機会を与えてくださったすべての皆様に心から感謝いたします。

「世界青年の船」事業既参加 青年東京連絡会議

2013年3月17日～3月23日



実施概要

1 目的

現在、世界各国の「世界青年の船」事業既参加青年たちは、事業を通じて得た国境を越えた友情や連帯感、異なる文化に対する理解、その他様々な知識や経験に基づき、その属する国、地域や職域、さらには国際的な分野において、社会貢献活動を行い、事業で得られたものを社会に還元し、もって、同事業の効果を高めてきているところである。既参加青年たちのこれらの活動は、各国の事後活動組織や事業年度を超えたグローバルな既参加青年間のネットワークの構築を通じて、日本の事後活動組織を中心とした、より積極的かつ自律的な動きとなりつつある。

このような「世界青年の船」事業既参加青年間のネットワークの構築・充実に支援し、事後活動の更なる活性化を図るため、各国の「世界青年の船」事業の既参加青年の代表者が、社会貢献活動への取組の促進とネットワークの充実強化等について意見交換を行い、ネットワークを活用した国際的な事後活動の推進等を図ることを目的として、既参加青年東京連絡会議（以下「連絡会議」という。）を実施する。

2 連絡会議の概要

(1) 参加国

オーストラリア連邦、パーレーン王国、ブラジル連邦共和国、カナダ、チリ共和国、コスタリカ共和国、エクアドル共和国、エジプト・アラブ共和国、フィジー共和国、ギリシャ共和国、インド、ケニア共和国、メキシコ合衆国、ニュージーランド、オマーン国、ペルー共和国、ソロモン諸島、スペイン、スリランカ民主社会主義共和国、スウェーデン王国、タンザニア連合共和国、トンガ王国、トルコ共和国、アラブ首長国連邦、英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）、ベネズエラ・ボリバル共和国、イエメン共和国、日本の28か国とする。

(2) 日程及び開催地

平成25年3月17日(日)から23日(土)までの7日間、東京にて開催

(3) 議題

- ア 社会貢献活動への取組の促進とネットワークの充実強化
 - (ア) 社会貢献活動への取組の促進
 - (イ) 現地日本大使館など日本関係者との連携
 - (ウ) 国内及び国際的ネットワークの強化のための取組
 - (エ) 国際的ネットワークをいかした事後活動の展開
- イ 「世界青年の船」事業、「世界青年の船」事後活動組織の広報の促進
- ウ 今後の「世界青年の船」事業への提案
- エ その他

3 参加者

(1) 外国人参加者

「世界青年の船」事業の既参加国のうち、事後活動を積極的に行っている又は今後の発展が期待される前述27か国の事後活動組織から代表者各1名連絡会議に出席する外国人参加者については、各国事後活動組織からの推薦に基づき、内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長が決定する。

参加者の資格要件

- ア 事後活動組織を代表し得る者であること
- イ 事後活動に積極的に取り組んでいる者であること
- ウ 英語に堪能な者であること
- エ 健康状態が良好な者であること

(2) 日本人参加者

日本青年国際交流機構の代表者1名
代表者は、日本青年国際交流機構の推薦に基づき、内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長が決定する。
参加者の資格要件は、外国人参加者に準ずる。

(3) 実行委員

実行委員は、連絡会議を企画・運営する。本年度の「世界青年の船」事業における事後活動連携強化プログラムの派遣代表者が含まれることが望ましい。

会議出席代表者

国名	氏名	参加回	役職
オーストラリア連邦	Zhen-Dan Bao	SWY19	Member
バーレーン王国	Mohamed Ali Ahmadi	SWY22	Board member
ブラジル連邦共和国	Leonardo Kajioka Nardon	SWY18	President
カナダ	Louis Pierre Beauregard	SWY13/17	President
チリ共和国	Karla Marión Cortés Jopia	SWY23	Member
コスタリカ共和国	Alonso Andres Villalobos Laurent	SWY3	Vice President
エクアドル共和国	Margarita Chattin	SWY22	Coordinator
エジプト・アラブ共和国	Vitta Abdel Rehim Ibrahim Ahmed	SWY14	President
フィジー共和国	Prem Lata	SWY21	Member
ギリシャ共和国	Konstantinos Tsigkaras Konstantinidis	SWY18	President
インド	Ravi Chopra	SWY6	General Secretary
日本国	Tamae Saito(齋藤 珠恵)	SWY10	Chief of International Division, IYEO
ケニア共和国	David Warobi Mbatia	SWY10	President
メキシコ合衆国	Jose De Jesus Ruiz	SWY15	President
ニュージーランド	Dana Jana MacDiarmid	SWY24	President
オマーン国	Ahmed Alhooti	SWY4/23	Deputy President
ペルー共和国	Gina Pamela Pancorbo	SWY24	Vice President
ソロモン諸島	Patrick Paul Amao	SWY19	Member
スペイン	Almudena Ramos Martin	SWY20	President
スリランカ民主社会主義共和国	Nipuna Tharuka Wachchi Hannadige	SWY22	Member
スウェーデン王国	Karl-Gunnar Ingvar Eriksson	SWY23	Treasurer
タンザニア連合共和国	Kissui Steven Kissui	SWY8	President
トンガ王国	Lokuvalu Leha	SWY3	President
トルコ共和国	Gül Ekşi	SWY12	President
アラブ首長国連邦	Nasser Mohammed Al Zaabi	SWY22	Member
英国	Dylan George Butler	SWY14	President
ベネズエラ・ボリバル共和国	Edwin Enrique Solorzano Castillo	SWY21	President
イエメン共和国	Yousef Abdulkarem Abo Taleb	SWY19/21	President

会議日程

月日	時間	日程	備考
3月17日(日)	終日	会議代表者 来日	都内ホテル泊
3月18日(月)	9:30 10:00 - 12:30 12:30 - 14:00 14:00 - 18:00 19:00 - 20:30	ホテルロビー集合、移動 会議 1 昼食 会議 2 歓迎夕食会	IYEO事務局 都内ホテル泊
3月19日(火)	9:00 10:00 - 12:00 12:00 - 13:30 13:30 - 17:00 18:30 - 20:00	ホテルロビー集合、移動 会議 3 - 内閣府との意見交換 - 内閣府特命担当大臣への表敬訪問 昼食 会議 4 内閣府主催歓迎レセプション	内閣府 都内ホテル泊
3月20日(水)	9:00 10:30 - 12:30 13:00 - 14:30 15:00	ホテルロビー集合、移動 各国事後活動発表会 - 1か国2分×28か国 - テーマ別分科会(来場者と交流) ランチ・パーティー フリータイム	国立オリンピック 記念青少年総合センター 都内ホテル泊
3月21日(木)	9:30 10:00 - 12:30 12:30 - 14:00 14:00 - 18:00 夜	ホテルロビー集合、移動 会議 5 昼食 会議 6 フリータイム	IYEO事務局 都内ホテル泊
3月22日(金)	9:30 10:00 - 12:30 12:30 - 14:00 14:00 - 18:00 18:30 - 20:00	ホテルロビー集合、移動 会議 7 昼食 会議 8 フェアウェル・ディナー	IYEO事務局 都内ホテル泊
3月23日(土)	終日	会議代表者 帰国	